始

301-10

古今詠藻集第四

秋上

秋三日詠

藤原敏行

秋来と先てきたれとたに見えねと

301-10

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

河辺の[illegible]

[illegible]

[illegible]

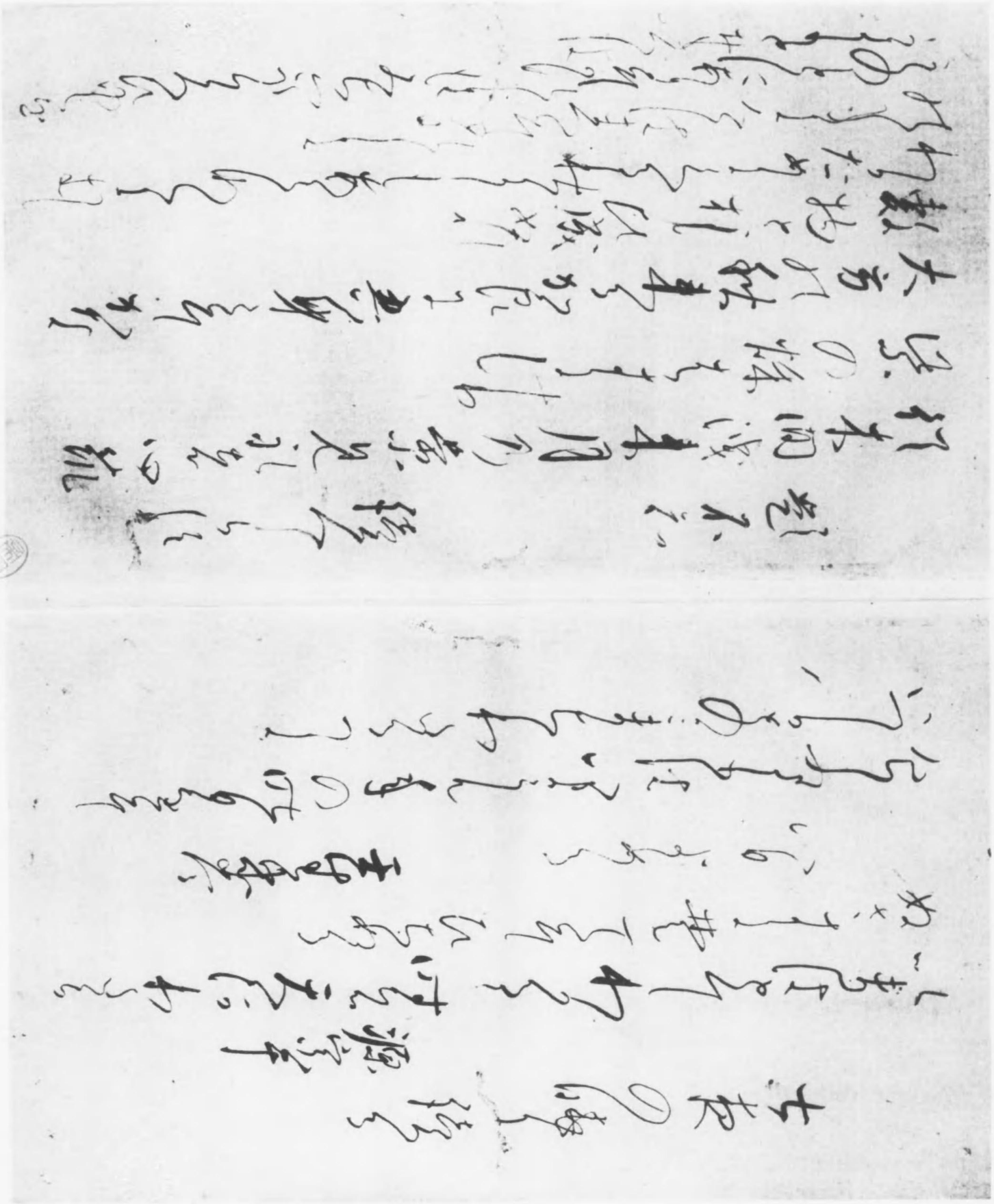
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

惟貞卿の家の会

徒しらば

[illegible]

書吟壺

[illegible]

[illegible]

知恒

[illegible]

[illegible]人さへ

題不忘

[illegible]

[illegible]

徒しらば

[illegible]

[illegible]

惟喬親王の家にて

[illegible]

[illegible]

月を待つ

[illegible]

秋の夜の月の光し明かれば

[illegible]

人の許に落葉を[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

[illegible]

惟貞親王家にて

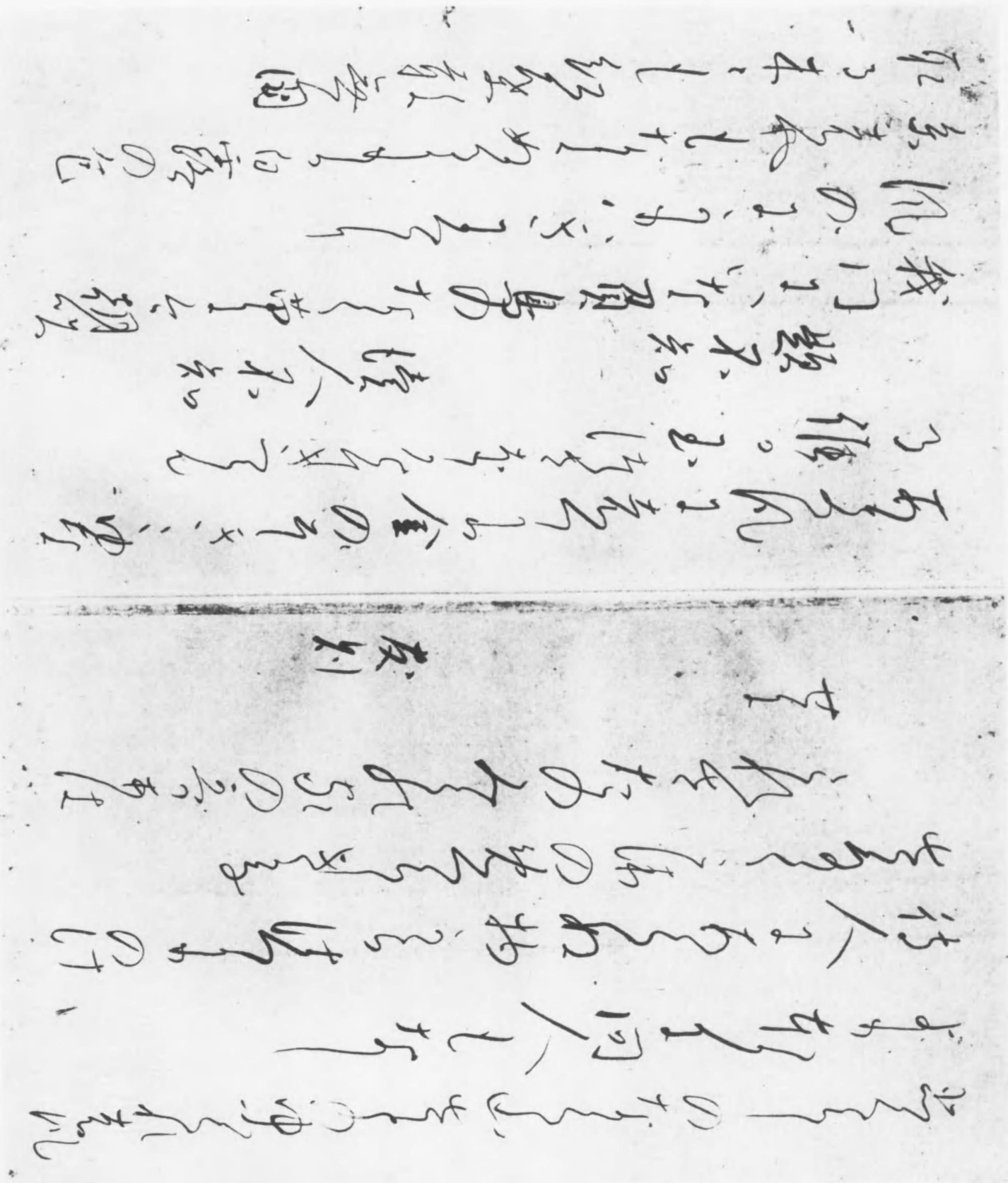
藤原宗千

[illegible]

[illegible]

[illegible]

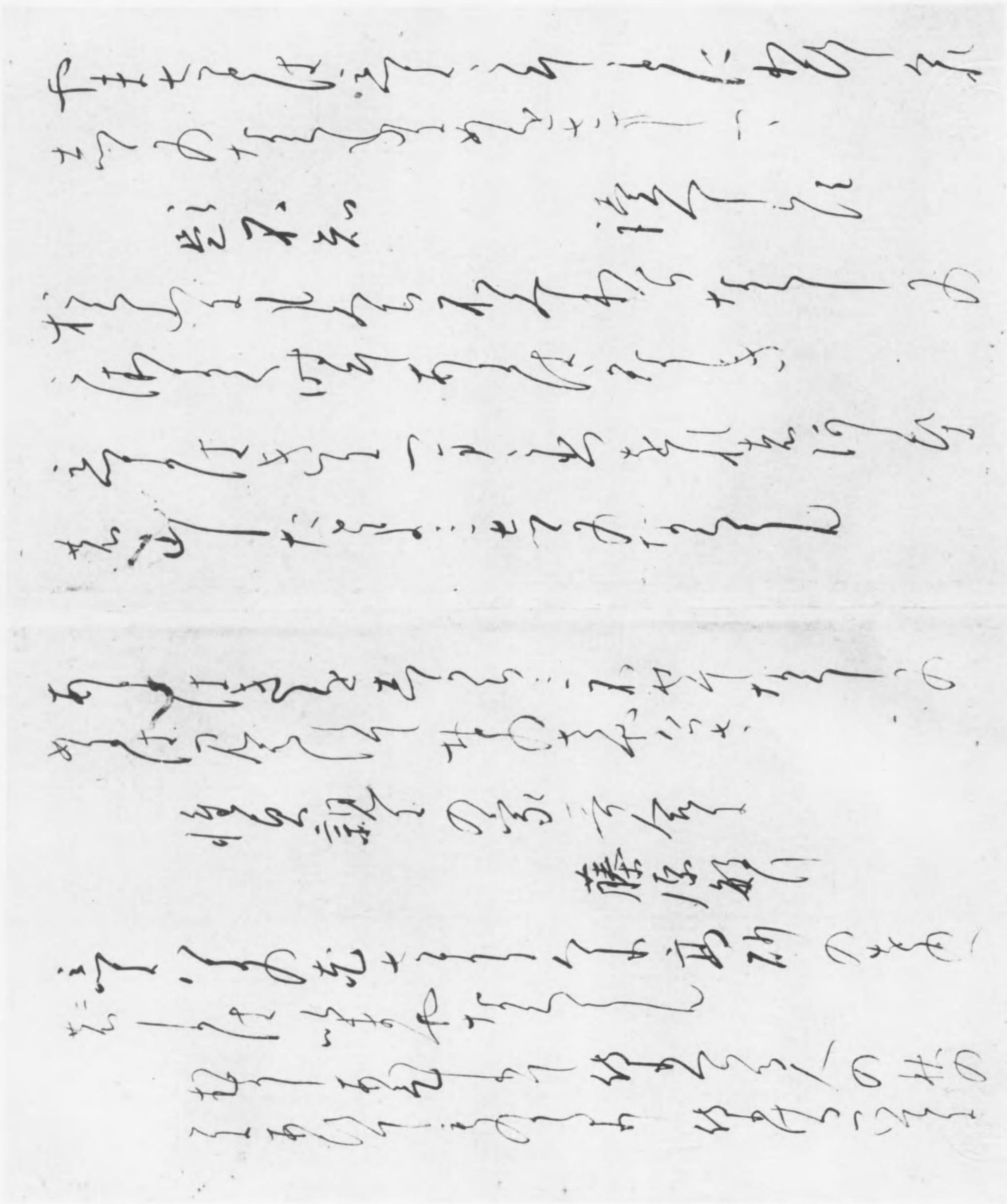
[illegible]

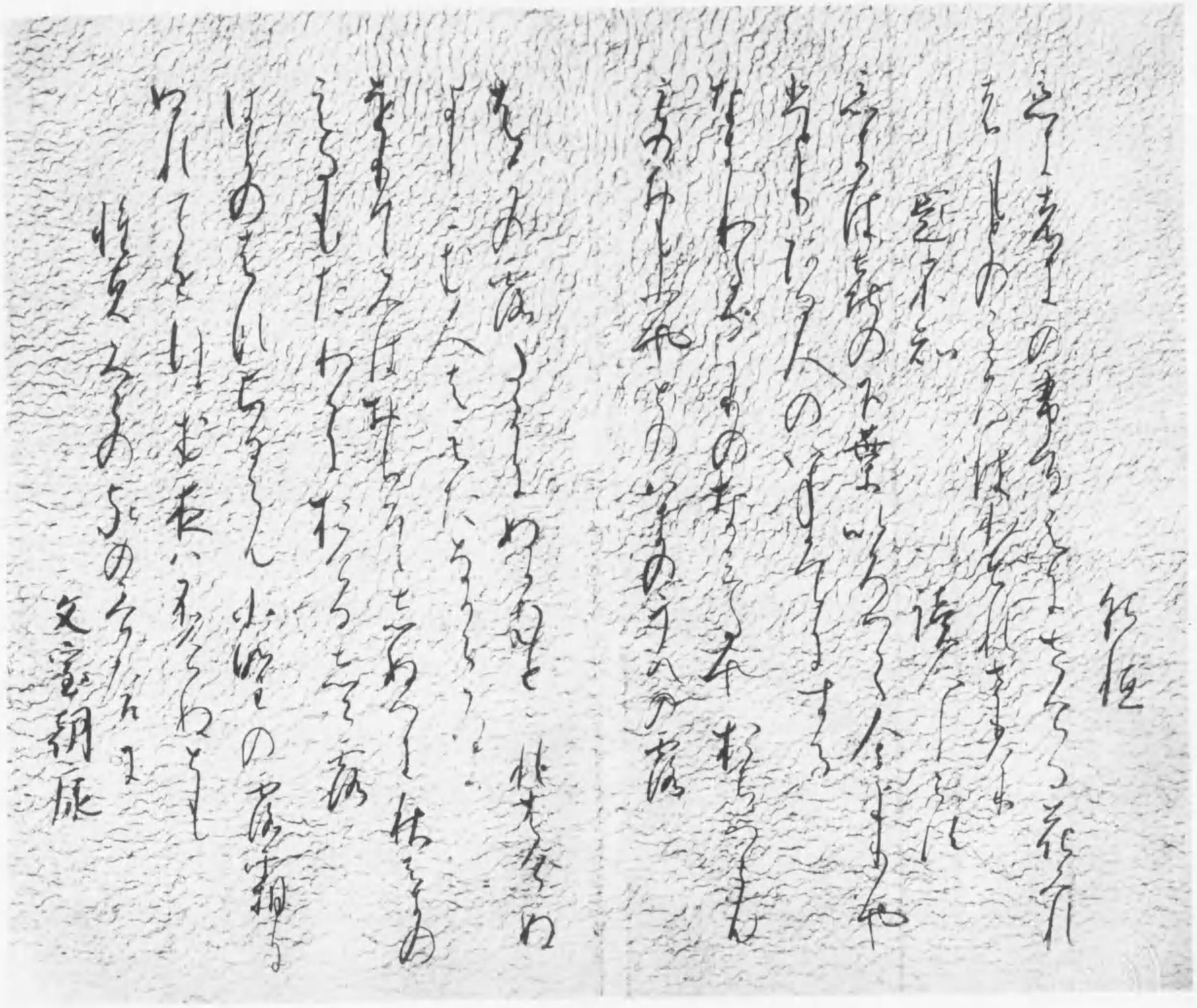


[illegible]

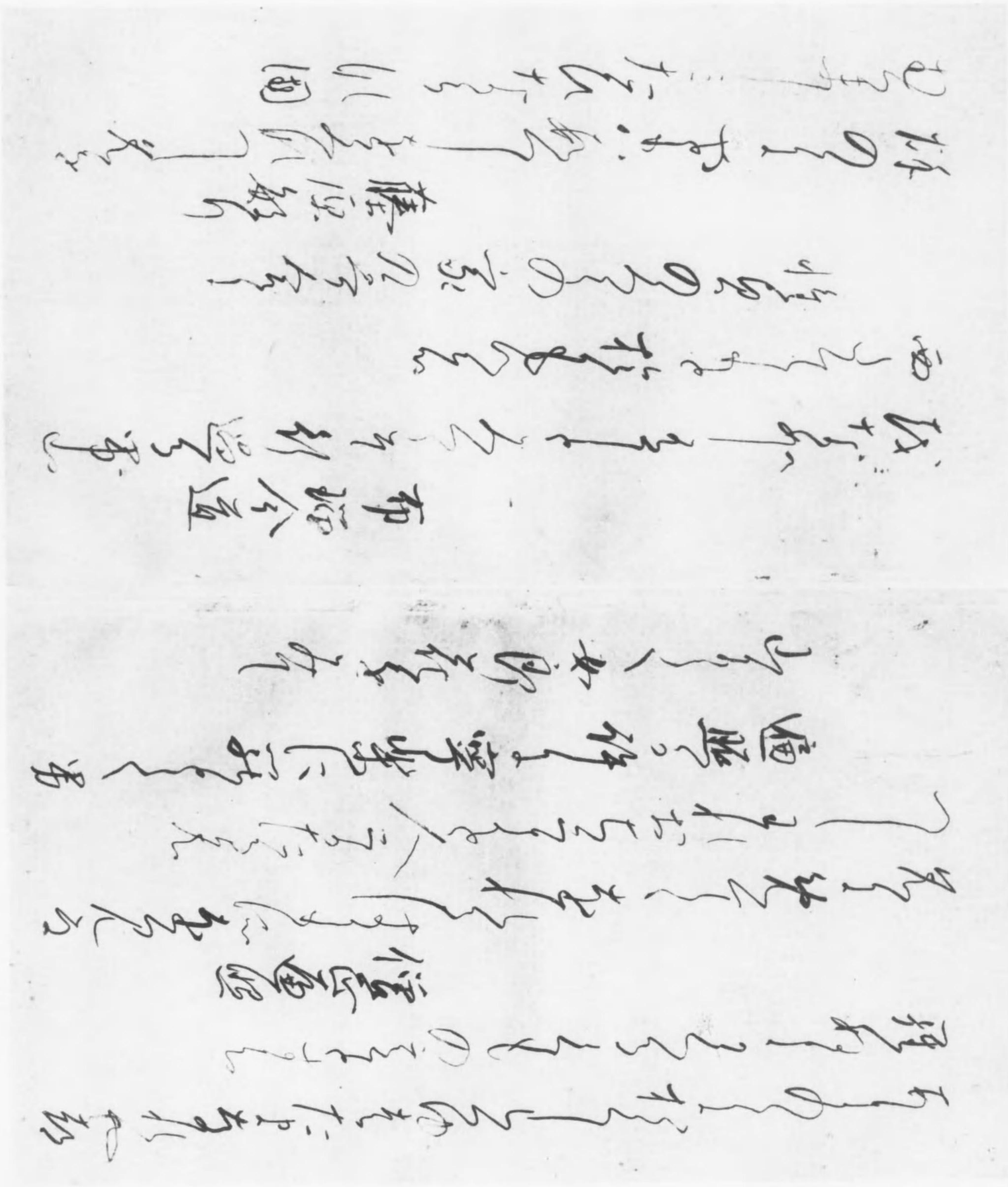
[illegible]

[illegible]





文宣朝臣



題不知

小野美材

[illegible]

朱雀院の[illegible]

けり

左大臣

[illegible]

藤原定方朝臣

[illegible]

[illegible]

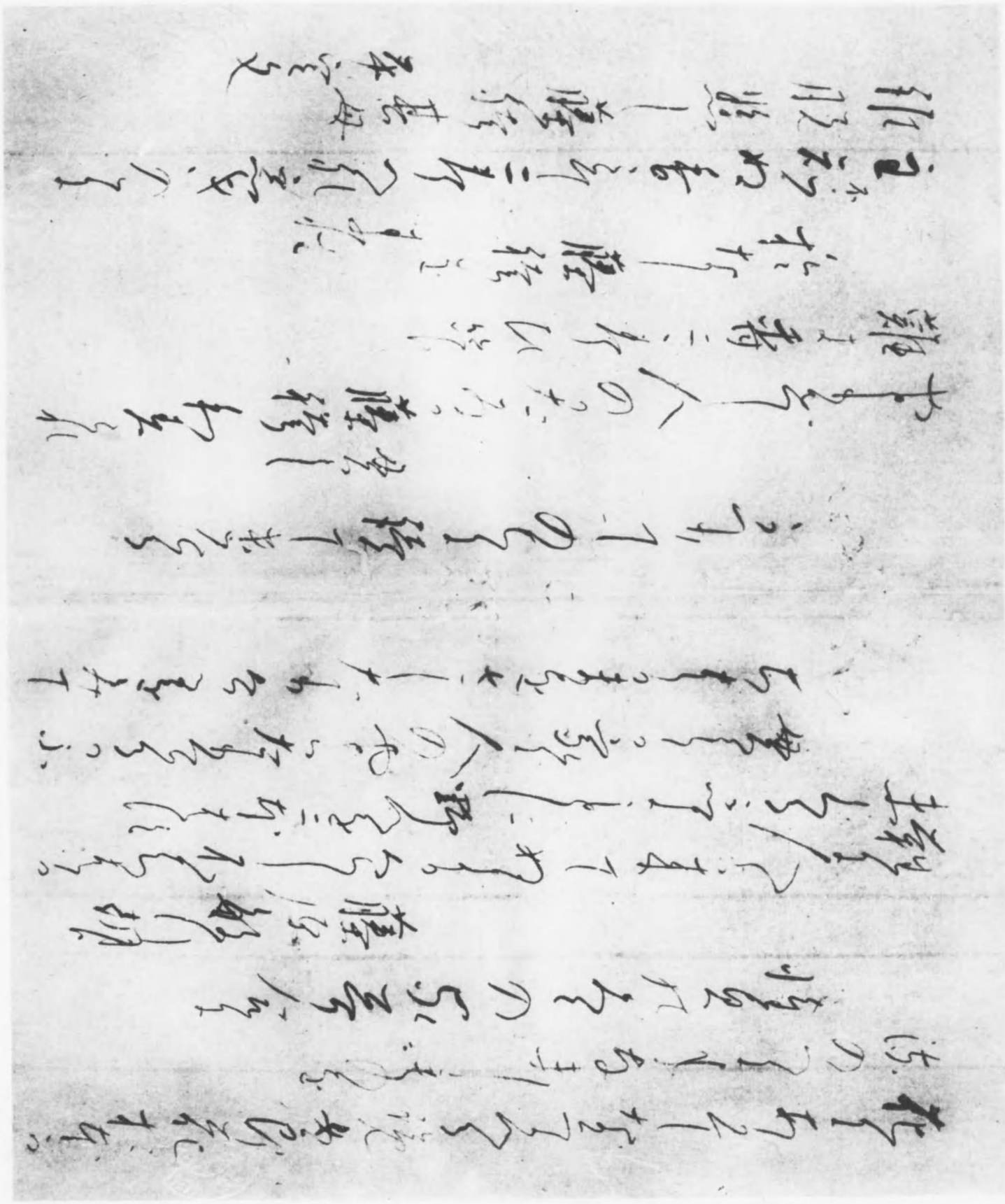
[illegible]

[illegible]

[illegible]と寿[illegible]

[illegible]

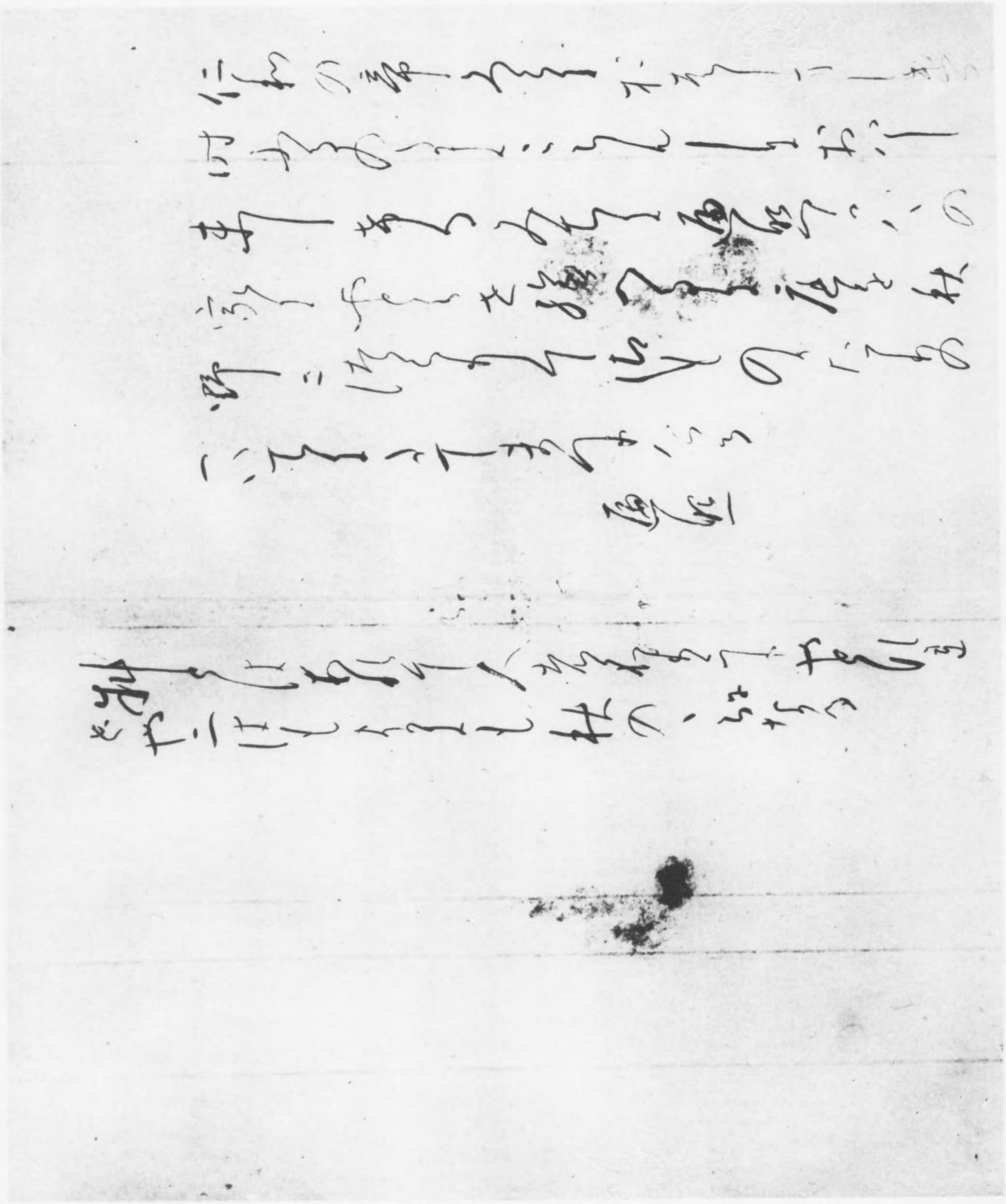
[illegible]

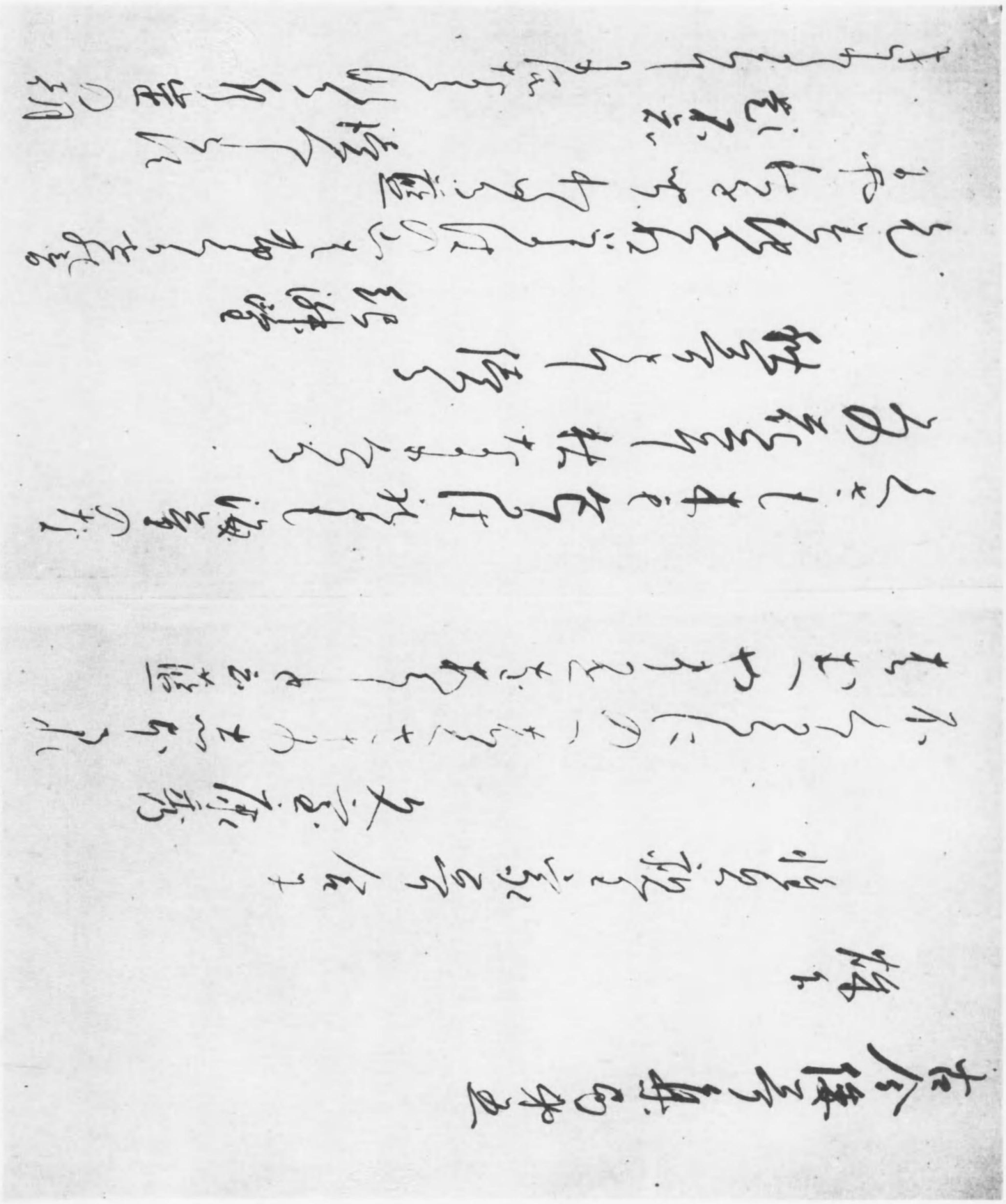


[illegible]

[illegible]

[illegible]





の時は黄葉しぬ梅

我門の木々の小さき葉なりしまま

うつろふ秋のまま

見紅の時は後結成の御前に梅

樹下の西の方に公

新殿の紅葉は

うつろひたりけりを

[illegible]

藤原勝臣

木々を[illegible]

西方に[illegible]始なりし

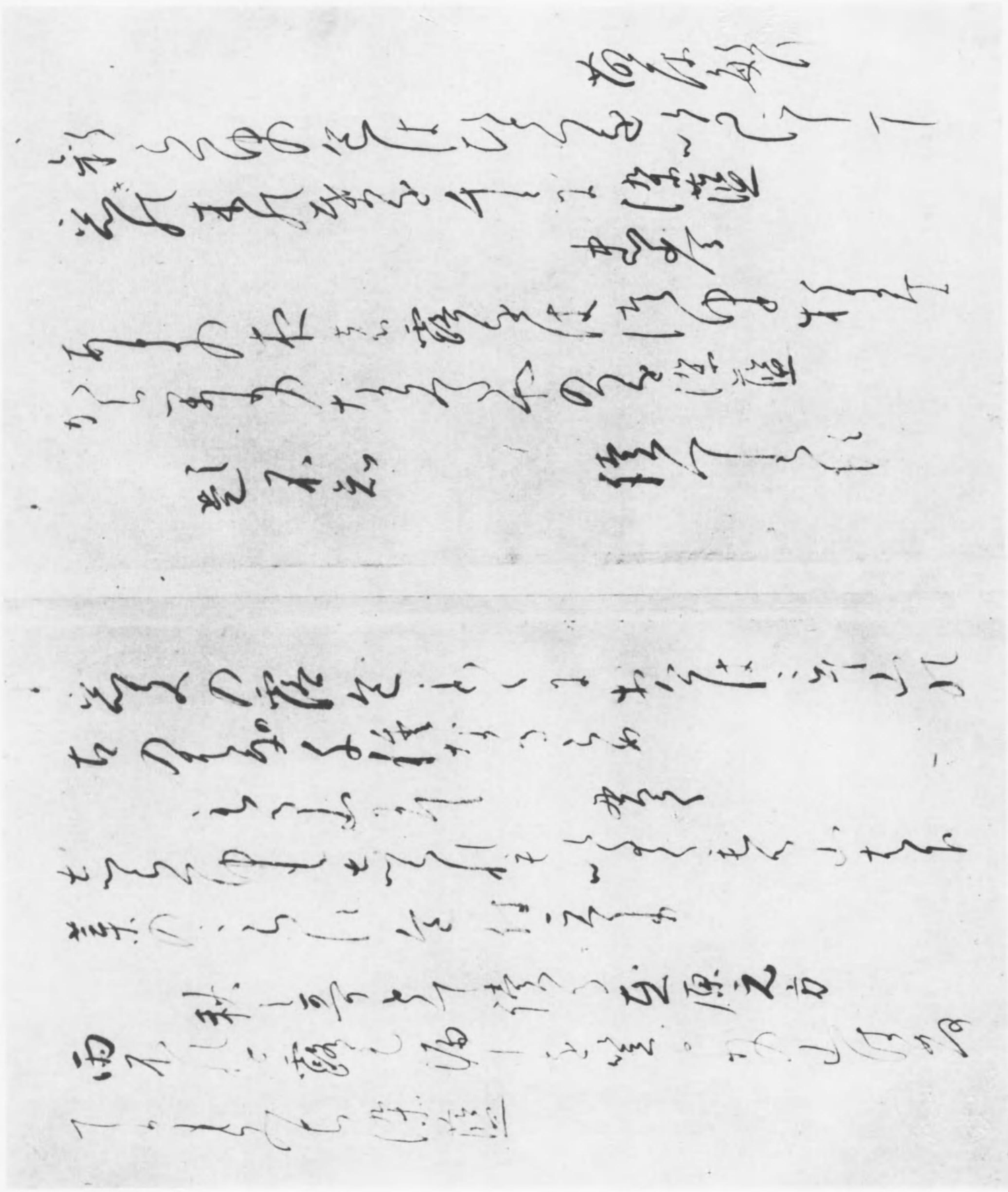
[illegible]

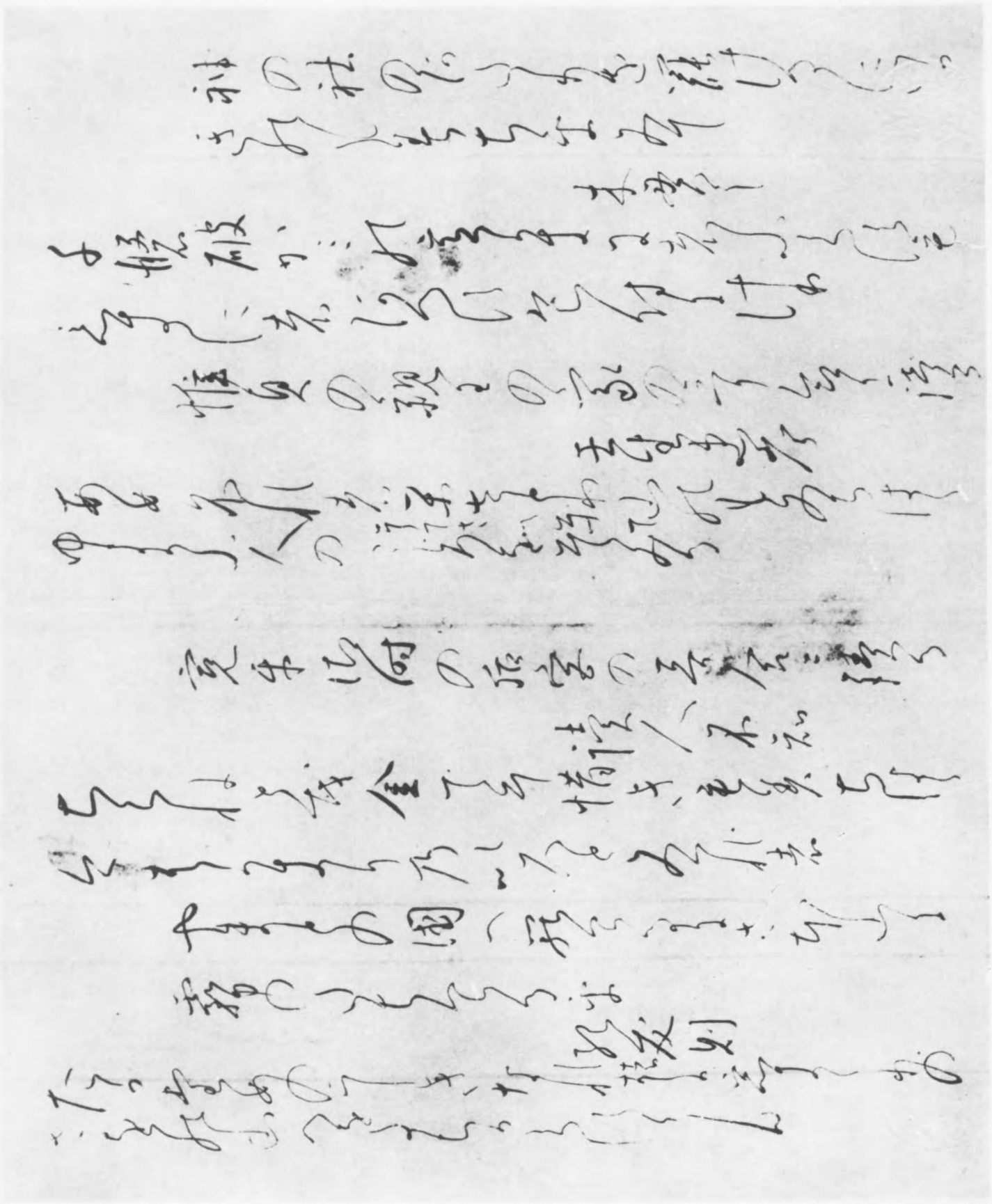
もみぢを[illegible]

秋風の[illegible]

家の[illegible]

[illegible]





惟貞親王のひらのこうあはせ

秋霧は心朝をなくなくたち仕ふ係

月毋く惜しみもよしてしてもいと丈

秋ごとにまがきの

坂上是則

佐保山のはつかれをしらしとと

雪のふるもなほまさりけり

人の家に前栽菊を結付けるを

在原業平

白菊の花とも見えぬまがきは

白雪ぞ降りてまがきはへける

惟喬親王の御供

末友利

露なりと折て頭挿菊花老をわが

身ぞ為うしつる

寛平御時菊合

藤原敏行

[illegible]

千里

殖時花待遠ふる枝に葉移る布色秋

小野篁

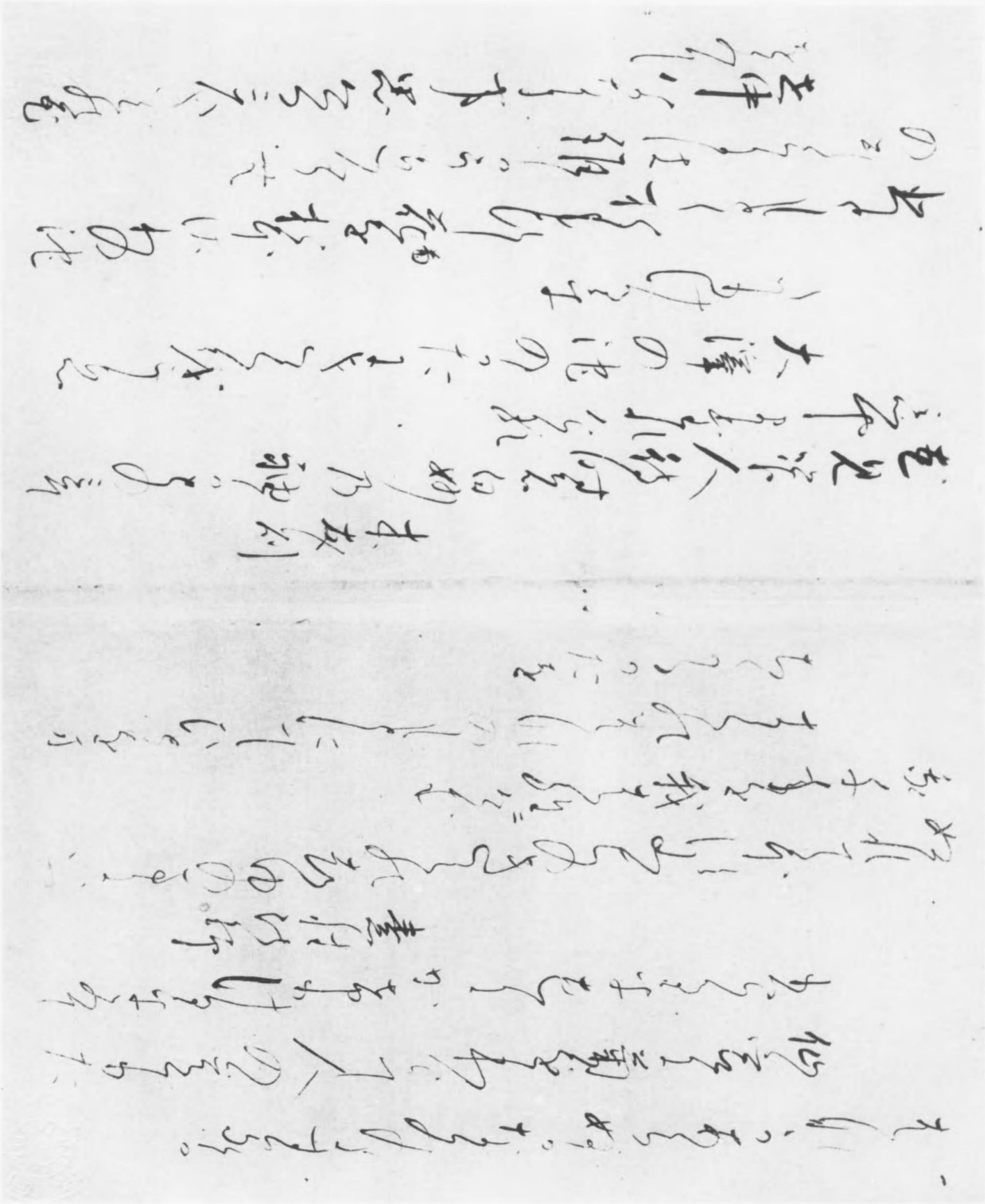
[illegible]

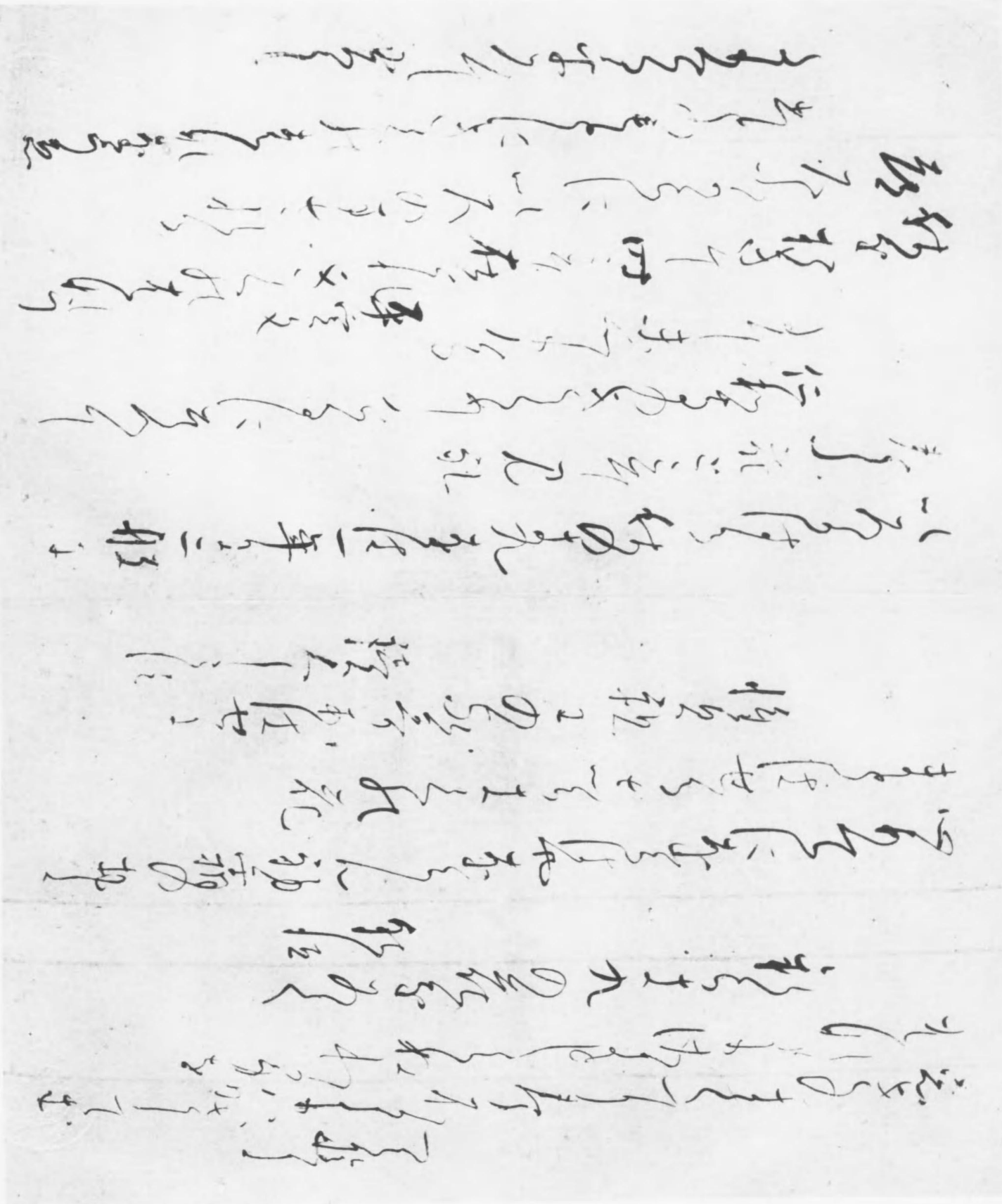
吹上に[illegible]

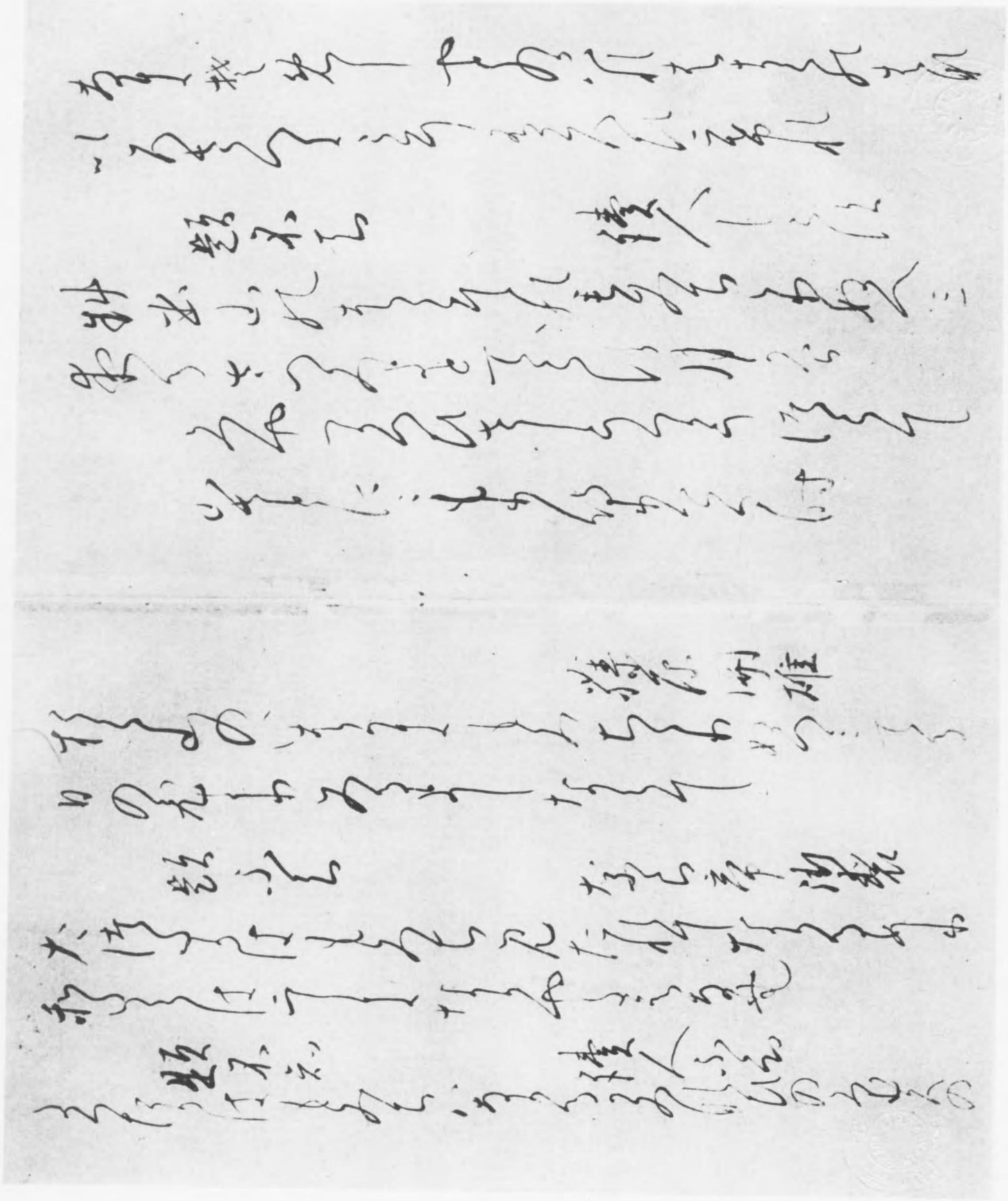
[illegible]

[illegible]

菅原朝臣







露光量違いの為重複撮影

[illegible]

はつ子二百首人のいとなるの部より

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

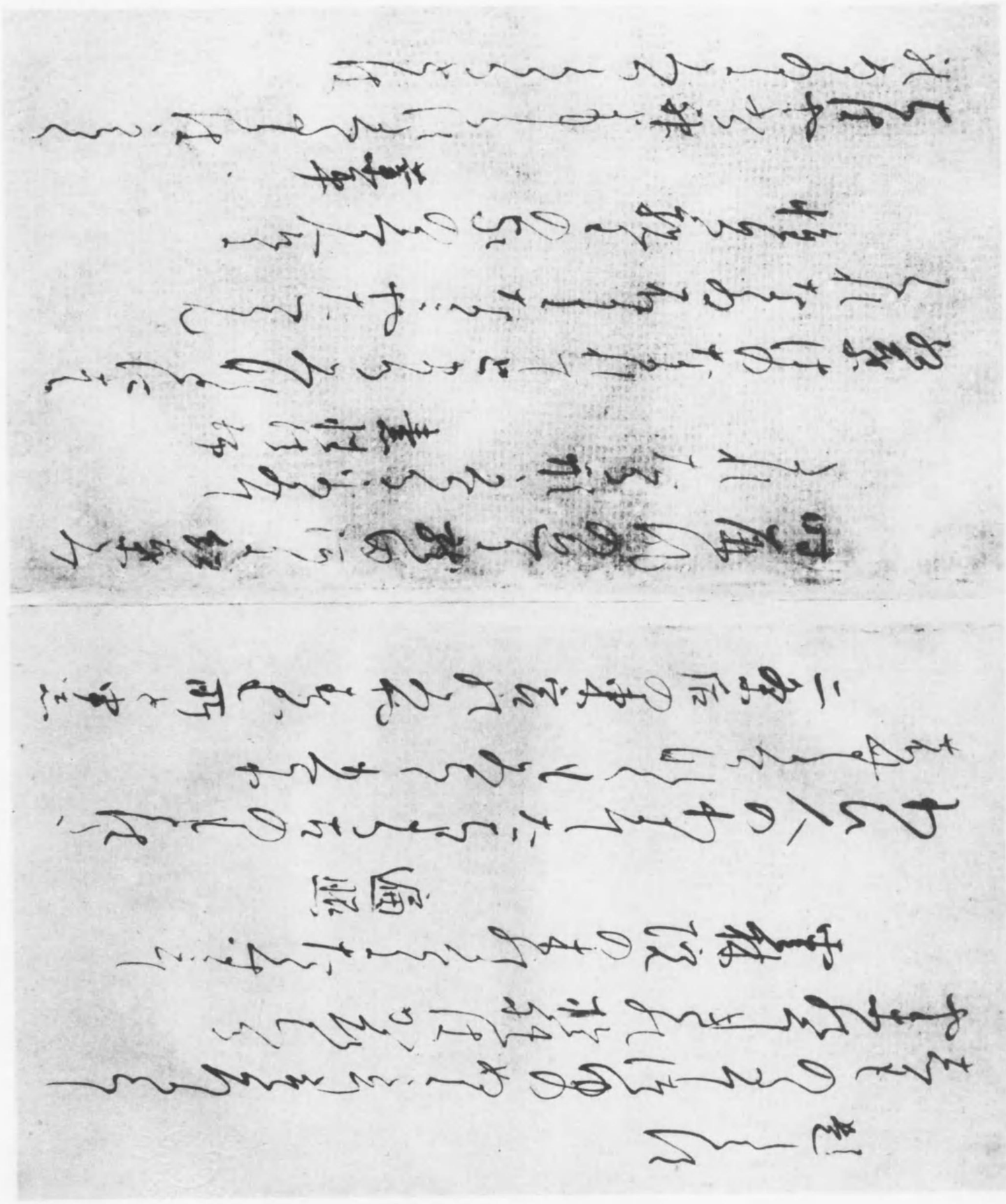
[illegible]

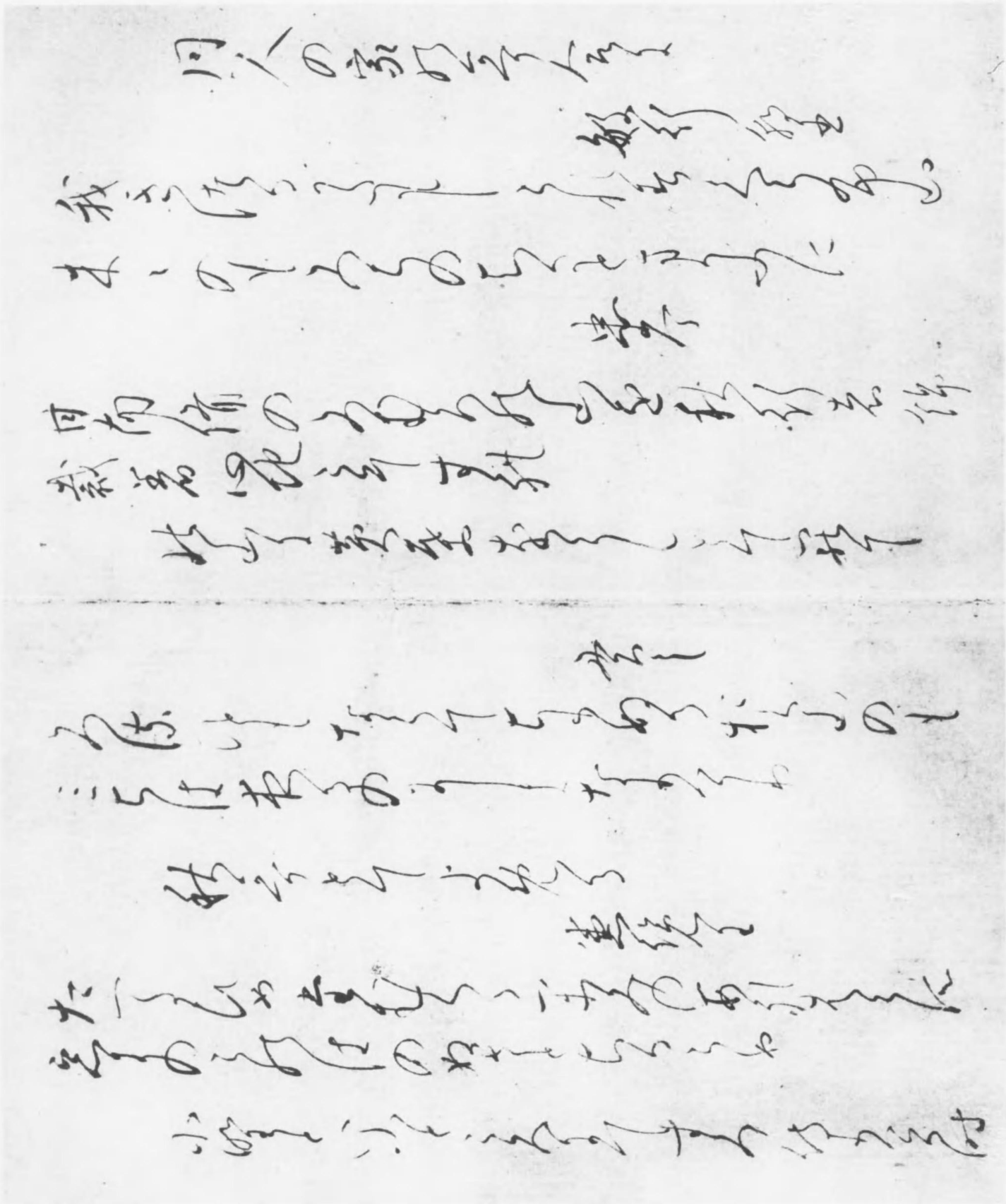
[illegible]

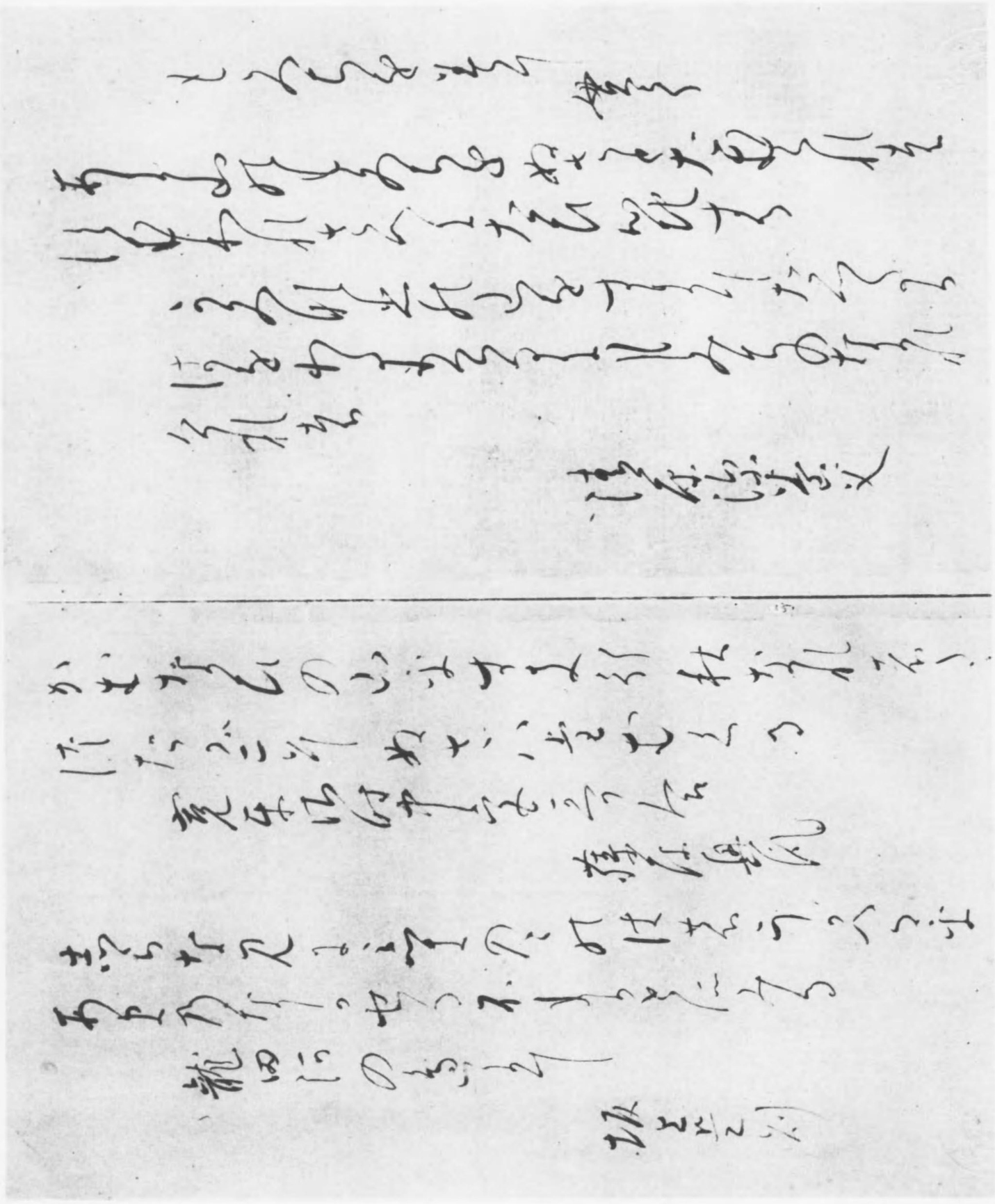
[illegible]

[illegible]

[illegible]





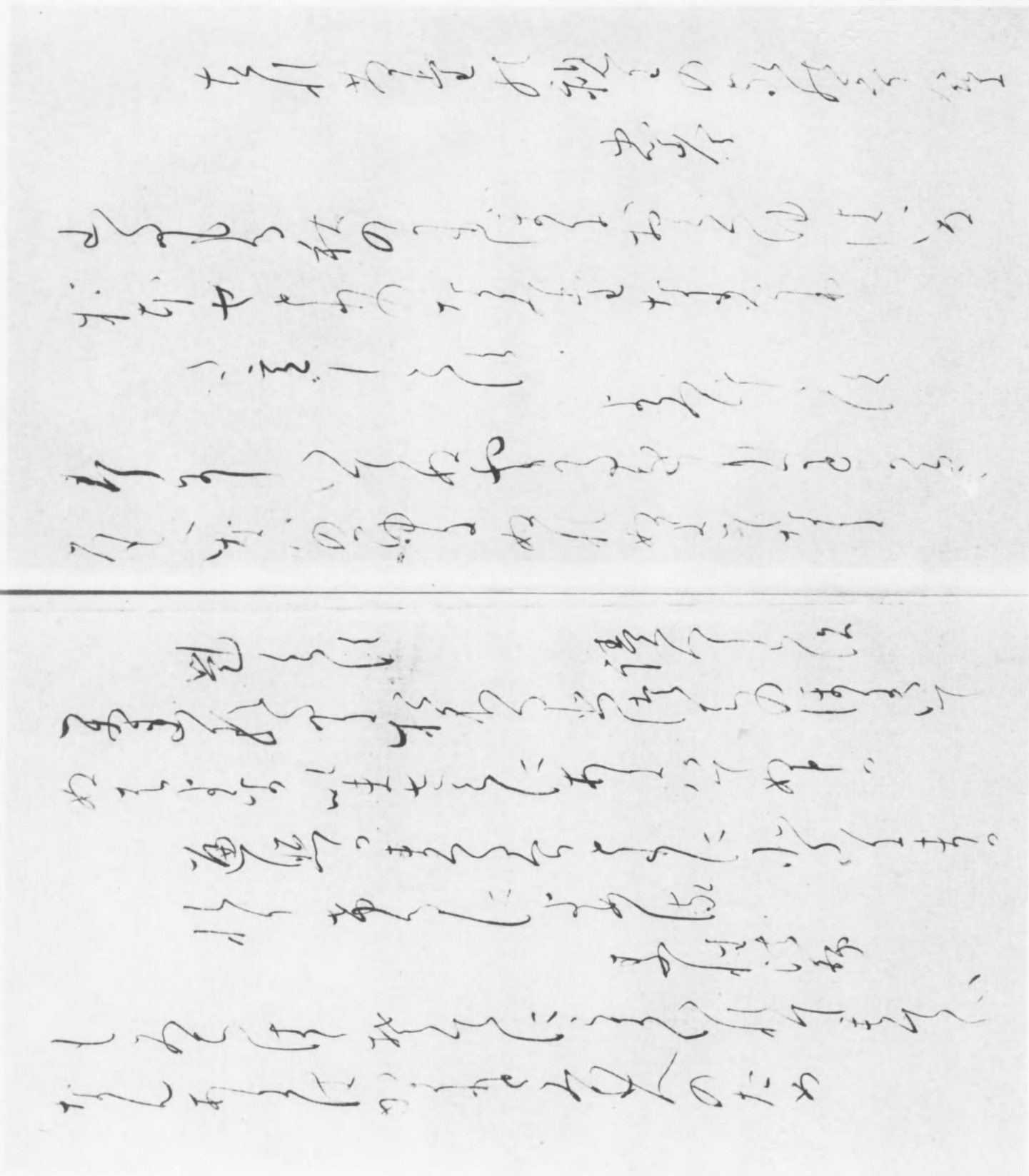


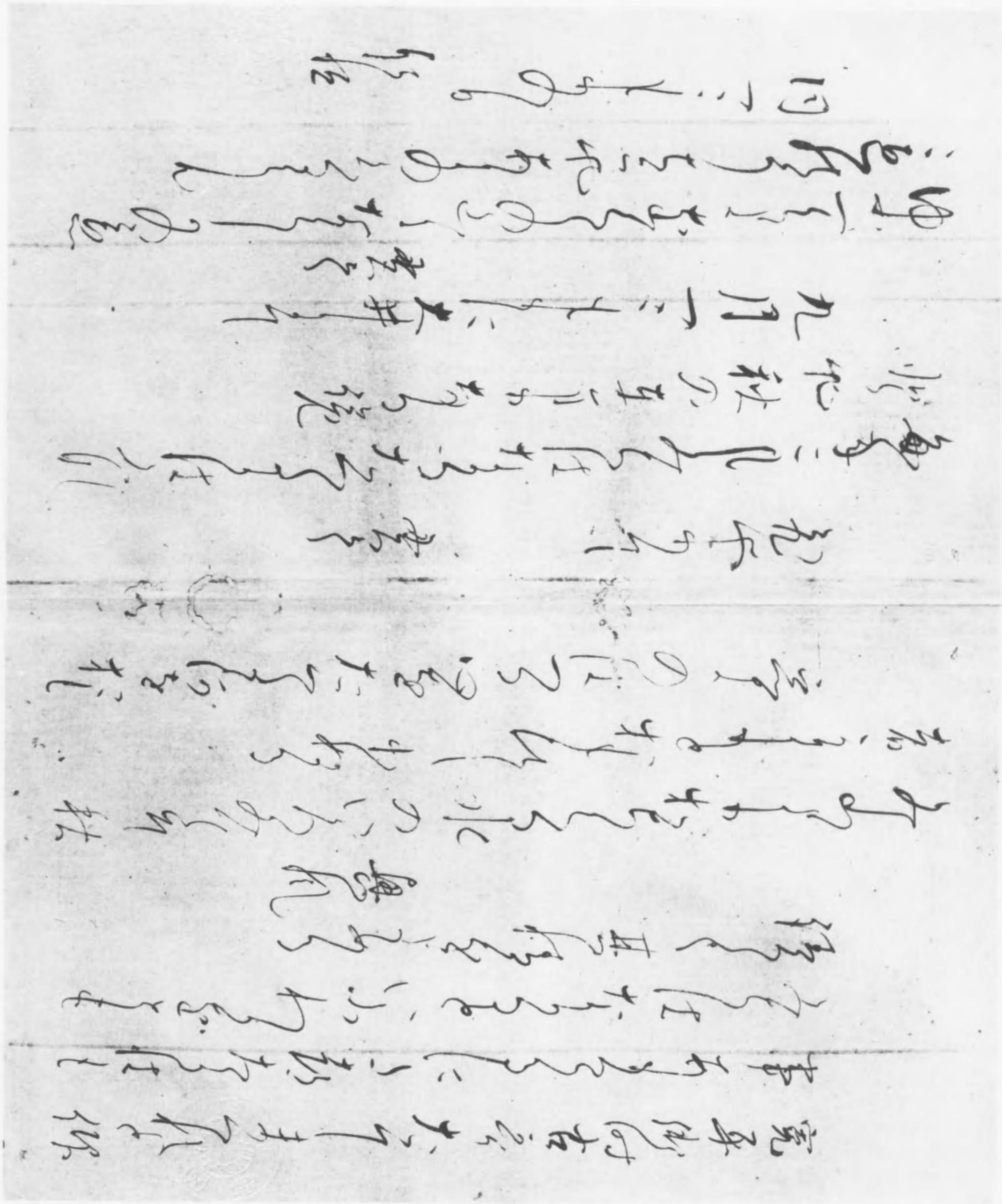
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]





露光量違いの為重複撮影

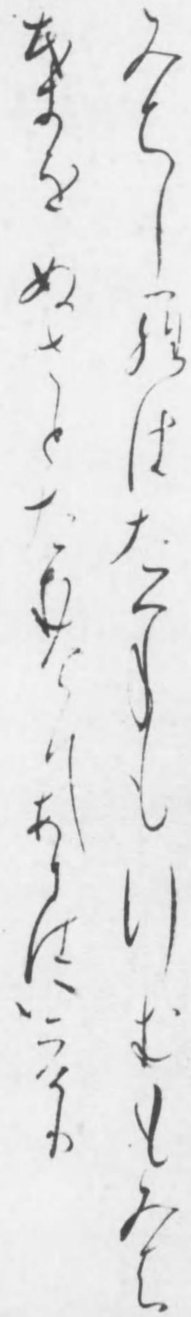
301
10

傳藤原佐理書

筋切

釋文

四



301
10

傳藤原佐理書

筋切釋文

四

301-10

古今和歌集　卷第四

秋上

秋立日讀る

藤原敏行

秋來と免爾者さや可け見えねと
毛風の音爾曾驚かれぬる

あ支能多つ日うへ能男共の可も
河爾道遙爾罷希るにとも爾

氏讀る

紀貫之

河風の涼も在香うちよす累なみ
とゝ茂爾や秋の多つらん

題不知　　讀人しら須

わ可春子可ころ裳能春そを不
支可へしうらめつらしき秋の初風
昨日こそ早苗取し可以都能麻兒
以な者裳楚よ支秋風そ吹
惡支可せの不支爾し日よ利飛さ可多
能あ万のうはな三たゝぬひ八なし
ひさ方能天原の王たし守君わ多利
なは可ち可くしてよ　不な可くし世よとも
銀河もみちを橋爾わ多世八や織女
つめの秋をしも待
こひ〳〵てあふ夜者今夜者天河霧
多ちわ多利阿希須もあらなん

寛平御時爾七日能ゆふへ爾作男共
歌獻と仰事あ利个るに人二
可は利て讀る　　紀友則

あま能可は惡さ世し良な見多と利つゝ
わ多利は年者阿希そし爾个累
於なし御時の后宮歌合爾　　藤原興風

契个むこゝろそつら支多なは多能歳
爾一度あふ者阿布可者　　凡河内躬恒

七日讀る
毎年爾阿ふとは數禮と織女農宿夜
能可すそ須く那可利个る

織女爾かし鶴糸能うちは惠て年
の緒長く戀やわ多藍

題しら須　素性法師

今夜日こむ人爾はあはしたなは多のひさし支
ほと爾あえもこそすれ

七夜の曉爾讀る

以まはとてわ可るゝ時者天河わ多ら
ぬさ支爾楚てそひちぬる

八日よめる　壬生忠岑

个ふよ利はいまこん年の昨日をそ
いつし可との三まちわ多るへ支

題不知　讀人しら須

從木間洩來月乃景見禮者心筑

紫の秋者支爾け利
大方能秋來る加良爾吾身こそかな
敷物と於もひ成ぬれ
わ可ため爾久る秋爾しもあら那く爾むし
能年支个はまつそ可那し支
毛のことにあ支そ可那し支もみち八ゝうつろひゆくを
可支利とおもへは
飛登利ぬる東こは草葉にあらね
と茂あ起久類夜ひ者露个加利个利

惟貞御子の家の歌合爾

讀人しら須

以都ことは時者わ可ねと惡支農夜そ
も能お无布事の可支利な利ける

雷鳴壺爾て人々あつま利氐
秋をゝしみ个るついて爾讀る

躬　恒

か久者可利をしと於もふよを意多つらに
ねてあ可すらん人さへそう起

題不知　　讀人しら須

新ら雲爾翼打可はし飛雁の可春さ
へみゆる秋農夜の月
散餘な可に夜農不けぬらし可利可ねのき
こゆる楚ら爾月わ多る三由

惟喬親王の家歌合爾

大江千里

ひさ可多能つ支の可つらもあ支はなを毛

みち須れ者や照まさるらん

月を讀る　　在原元方

秋の夜能月能光し明个れ者くら布
農山もこ盈ぬへらな利
人の許爾罷禮り个る時き利〳〵須

能な支个るを聞く　　藤原忠房

支利ゝゝ須意たく那ゝ支そ惡支のよ
能な可支思者吾そ万される

惟貞親王家能歌合爾　　藤原宗于

秋之夜乃あくるも不知なくむしはわ可こと
わ可こともの や可那し閑るらん

題不知　　讀人不知

あ起者支もいろつ支ぬれ者支利〳〵須

わ可ねぬことやよるは可なし支
あ支のよ能つゆこそことにさむ可らし
久さむらことに无しのわふれ者
き見し能布久さ爾や徒るゝ不る
さ登はまつ无しのねそかなし可利ける
惡支のゝ爾みちも万とひぬ万つむしの
惠須る可多爾やとや可ら万し こ
あ支のゝ爾人まつむしのこ衞春那利
われ可と行ていさと不ら者無
毛三ちはのち利てつもれるわかやとの多れ
をまつむしこゝらなくらん
悲くらしのな支つるなへ爾日はくれぬ
とみれ者山の可个爾そあ利个る

悲くらしのなく山さとのゆふくれ者風
よ利本可爾問人もなし
待人爾あらぬ物可らはつ可利のけ
さなくこ衞の免つらしき可な

これさたのみこ能家の歌あは

せ爾　友　則

あ支風爾者つ可利金のそきこゆな
る誰可玉徒さを可个てきつらん

題不知　讀人不知

我門爾いな負鳥のなく苗爾今朝吹
風の爾可利八き爾个り
糸者やもな支ぬる可利可白露の色
取る木々も紅葉敢無國

者る可須三か須みて以爾し可利可ね者
伊まそなく那る秋き利のうへ爾
夜を寒三ころも可利兼鳴苗爾萩
能下葉も色付二个利

此歌或人のい者久柿本人丸可な利

寛平の御時后宮能歌合爾　藤原菅根

あ支可せにこゑをほ爾あ个て久るふ年八
天能とわ多る雁爾そ在个る
か利のな支けるを讀める

凡河内躬恒

有起こと越おもひ徒ら年てか利可年能
な支こそわ多れ秋のよな〳〵

惟貞親王能家の歌合爾

壬生忠岑

やまさとは惡支こそことにわひし个れ
志可のな久年爾めをさ万しつゝ

題不知　讀人しら須

於く山爾もみち不みわ个なくし可の
こ衛支く時そあ支は可なしき
惡支はき爾つ万こ悲をれ者阿しひ支
農山したとよ三志可のなくらん
あ支はきを志可ら三不せてなくし可の
め爾は見え須ておとのさや个さ

惟貞親王の家歌合爾

藤原敏行

惡支八支の花さ支爾个利高砂のをのへ

農し可は以まやなくらん

む可しあ飛し利て侍利个る人の秋の

ゝ爾あひて毛の可多利し侍利けるついて爾

躬　恒

惡支者支の布るえ爾さ个る花みれ

者もとのこゝろはわ春れさ利个利

題不知　讀人しら須

惡支は喜の下葉以ろつく今よ利や

悲と利阿る人のい年可て爾する

な支わ多る可利のな三多や於ちつらん

毛のおもふやとの八支のうへの露

者支の露多ま能ぬ可むとゝれ者个ぬ

よし三む人者えたな可らみよ

を利てみはおちそ志ぬへ支秋者支の

え多もたわゝ爾於个る志ら露

は支の者那ちるらん小野の露霜爾

ぬれてを行む夜八不个ぬとも

惟貞みこの家の歌合爾

文室朝康

あ支のゝ爾於くしらつゆ者たまなれや都

羅ぬ支可くる久もの意とすち

僧正遍照

名爾免てゝをれるは可利所を見な

へし王れおち二支と人二可たる名

遍照可許爾事樂に罷と氏男

山爾氏女郎花をみて

布瑠今道

越なめし有しとみつゝそ行過る男山
西多て利と於もへ者

惟貞のみこの家の歌合爾

藤原敏行

秋のゝ爾やと利八數へしをみ那へし名を
むつ末し三たひなら那國

題不和　小野美林

乎み那へし於本るのへ爾やと利世八あや
な具阿堂能名をや多つ續(?)ん

朱雀院の女郎花合爾讀氐獻
ける　左大臣時平

越み那へし惡支の野風爾うちなひ支

こゝろひとつを多れ爾によ須らん

藤原定方朝臣

あ支名ら氐惡布こと可堂起乎見なへ
四天之河原爾於ひぬ物遊ゑ

貫之

多可秋爾惡らぬ毛乃由ゑ女郎花な所
以婁爾意天ゝ末堂起宇門呂布

躬恒

妻戀る鹿そ鳴なる女郎花おの可須
む野の花としら須や
乎み那へし吹須支て久る惡支可世は
免爾はみえ年と香こそ志る个れ

壬生忠岑

悲度のみる事や久るし支を三なへ
しき利の万可支爾たち可くれつゝ

素　性

悲と利の三な可むるよ利八をみ那へし我
春むやとにうゑて三まし越
物へ罷个る爾人の家爾女郎花う
ゑ多利遣類を見天

兼　覽　王

を美なへしう志ろめた久裳美遊る可な
荒多るやとに獨多て禮者
寛平御時二藏人所男共嵯峨野爾
花み爾罷氏歸とて歌讀ついて二

平　定　文

花爾あ可てな二可へる覽女郎花於本可
流のへ爾年な末し毛のを

惟貞能みこの家歌合爾

藤原敏行朝臣

難爾人爾來てぬ支可个し不ち者可
末久る惡支ことに野へを二本者須

貫　之

可家爾人のやと利た利个る可ふ
ち者可まをさした利个るをみて
可へ利てのち爾讀て遣个る

貫　之

やと利世し人の可たみ可藤袴和春られ
難支香二丶奉ひ管
於なし藤袴を

素性

主知ぬ香こそ二奉へ禮惡きのゝ爾
誰脫懸し藤袴其母

平貞文

從今者殖氏谷爾みし花薄穗爾出
る秋者久るし可利个利

寬平御時后宮の歌合爾

在原棟梁

惡支のゝ乃くさの手下可者那すゝ支本二
いてゝ招曾てとみゆらん

素性

わ連の三やあはれとおも八むひ久らしの鳴
夕暮能大和と撫志子

題不知　讀人しら須

みと利なる悲とつ久さとそ春八みし
惡支八色々の花爾そあ利个る
毛ゝ久さの花のひもと久秋のゝ爾おもひ
多者れむ人なと可免所
月草爾こゝろも者須らん朝露爾ぬれ
ての色(のち?)はうつろひぬとも

仁和の帝みこ爾於者し万し遣る
時ふるの多支こらんし爾お八し
末し希るみち爾遍照可八ゝの
家爾やと可世給へる爾庭を秋
野二徒く利て御もの可た利の
ついて爾多てまつ利个る

遍照

斜とはあれて人者不利二しやと那連
とや二はもま可支も秋のゝらなる爾

古今倭歌集　卷第五

秋　下

惟貞親王家歌合爾

文屋康秀

不久可らにのへ農久さ支の志本るれ
者むへやま可世をあらしと云藍
久さも木毛色可は禮とも海童のな
みの花二そ秋な可利个る

紀淑望

毛美地世ぬと支はの山者布久可世能音
爾や秋を聞わ多る藍

題不知　讀人しら須

き利多ちて可利所なく那る片岡の朝
のはらは黄葉しぬ嵐
我門のわさ田のい年も苅なく爾ま
多支うつろふ神なひのも利

貞觀御時綾綺殿の御前爾梅
樹あ利ける可西の方爾さ世り个
類枝の紅葉八しめた利けるを
うへ爾候男共歌讀次爾よめる

藤原勝臣

於なしえをわ支て木能葉の色付八
西こそ惡支能始な利个れ
石山爾まうてける時おとは山乃
毛みちをみて　貫之

秋風のふ支爾し日より於とはや万
峯の木須ゑ裳以ろつ支耳个利

惟貞能みこ能家の歌合爾

藤原敏行

新らつゆの色はひとつを以可にして
惡き能木能葉を千々爾染藍

忠岑

あ支の夜者露をは徒ゆと於支な
から閑利のなみ多やのへを染藍

題不知　讀人しら須

惡支の露色こと〳〵爾お个はこそ山能
古の者な千種なるらめ
毛る山爾て　貫之

志らつゆも志くれ毛以多く毛る山者下
葉のこら須色付二个利

秋之歌とて讀る　在原元方

雨不れと露毛漏しを笠と利の山は如何
て可もみち染藍

神の社の阿多利を罷けるにい可
き能も美ち乎みて　木貫之

千盤破か三能意可支爾者ふ久須毛
惡支に者阿へ須色付爾け利

惟貞の親王の家の歌合爾讀る

壬生忠岑

あめ不れ者閑さと利山能もみちはゝ
ゆ支可ふ人のこゝろそへそてみる

寛平御時の后宮の歌合に讀る

讀人不知

ちらねと茂金てそ惜き毛美ちはゝ
今者可支り乃以ろとみつれ者

やまとの國へ罷个る爾さ本山爾
霧の多ち个る乎　紀友則

た可堂めの二しきなれ者可惡支ゝ利の
さを能山へを多ち可久須らん

惟貞親王の家の歌あはせ爾

よみ悲としら須

秋霧は今朝者な多ちそ佐保山
能母ゝ其もみちよ曾にて毛三無

秋歌とてよ免る

坂上是則

佐保山のはゝそ能毛みちう須个れと
惡支の不可久もな利爾希る可な
人の家能前栽菊爾結付てうゑ个る

在原業平

う衛しうゑは惡支なき時やさ可佐
良無花こそ千らめ根さへ可れめや
惟貞親王の家歌合爾

木友則

露な可良折て頭挿菊花老世ぬ秋
能悲散し可流へ具
飛さ可多能具裳能うへ爾てみる支くは
阿末っ本しとそあや万多れ个る

此歌者万堂うへゆるされ散利
个る時めしあ个られてつ可う万
徒るとなん
於なし御時爾后宮の菊合爾

千里

殖時花待遠爾在し菊移呂布色秋
爾逢とやみ志

於なし御時のきくあはせ爾洲濱二
吹上能者万を徒く利て菊花
をうゑ多利个る爾そへ多利ける

菅原朝臣

歌

惡支可せの不支あ个爾たてる志ら支久は
者那可あらぬ可なみのよす累可

仙宮爾菊をわ个て人の意利た
利个る乎恵爾か希利ける乎みて

素性法師

ぬれて本須山ちのきく能都ゆの万爾いつ
家千年を我者經个む

支く能者那のもとにてひとを万
ち多る可たを

木友則

花見管人待時者白妙乃袖可との三そ
惡やま堂れ个類

大澤の池の可た爾き久越うゑ
多利ける乎

悲ともとゝ於もひし花を於本佐わの池

の曾こ爾は誰可うゑ个無
世中八可な支事思个るこ呂き久能花

をみて　つら遊支

惡きの支く耳奉不可支利八かさしてむ
者那よ利佐支としらぬわ可身を
新ら支九の花をみ氐

躬恒

心あてにをらはやをらん初霜のお支
まとはせる志ら支久能花

惟貞親王の家歌あはせ爾

讀人しら須

以ろ可はる秋の支九をは一年爾二般爾
奉ふ花とこそ見禮

仁和寺の菊めし个るにそへて

多て末つ利个る　平　定　文

秋を於きて時こそ在个れき久能者那う
都ろふ可らに以呂の万される

悲との毛とにき久能者那をうゑ
多利个る乎みて　貫　之

散支楚免しやとの可八れ者支く能者那
以ろさへ爾こ曾有つろひ二希れ

題不知　讀人しら須

斜本山能者ゝそ能毛みちゝ利ぬへ三
夜るさへみよとてら須月可个

みやつ可へひさしうつ可う徒らて
山さとにこも利侍利个る時

藤原關雄

於く山のい者可支もみちゝ利ぬへ三てる
日の飛可利みるよしなくて

題不知　奈良帝御製

た徒多可はもみち見たれてな可るめ利
和多らは二し支な可や多えな無

讀人不知

多つた可はもみち八な可る可み那ひのみむろの
邪末爾新具れ不類らし

此歌二首或人のい者久ならの帝御歌

藤原關雄

こひしくはみて裳しのは無毛みちは
越不支那ちらしそ山おろしの風

あ支可せ爾阿へ須ち利ぬるもみちはの
ゆ久ゑさ多めぬわれそ可那し支

題不知　　讀人しら須

秋八來ぬ黄葉八やとに不利　支ぬみちふ
美わ个てとふひとはなし

布三わ个て佐らにやとはむ毛みちはの
不利可九してしやとゝみな可ら

あ支の徒支山へ散や可にてら世るはちる
もみちはの可須をみよと可

布久可世能ちくさの意ろ爾美えつるは
惡支のこ能者能ちれ者那利个利

題しら須

志もの多て徒ゆのぬ支こ曾毛ろ可らし

や末能二しき能於禮はか都ちる
雲林院の木能可个爾たゝす三て

遍　　照

わひ人のわ支てたちよる古のもとは多
農無可个那久もみちゝ利个利

二條后の東宮能みや春む所と申志
時屏風のゑ爾龍田河爾紅葉み
多れたる形可个る乎みて

素　性　法　師

紅葉はのな可れてとまるみ那とに者
くれなゐ不可支な三やたつらん

惟貞親王の家の歌合爾

業　　平

ちはやふる神よもしら須多つ多可は可ら久
禮なゐ爾みつ久ゝるとは

同人の家能歌合爾　　敏行朝臣

我き徒る可多もしられ春久ら布山
木々のもみちのちると万可ふに

忠岑

甘南備のみむろ能山を秋行者錦
裁着心地こそす禮

北山爾黄葉をらんとて罷て

貫之

み流ひともなくてち利ぬる於く山のも
三ちは夜るの爾し支な利个利

秋歌とてよ免る　　覽王

たつ多ひめ堂む久る閑みのあ禮者こ所
惡支のこ能はのぬさとちるらめ
小野といふところ爾てすみ侍利个る時
もみちを美て

貫之

あ支山能もみちをぬさとたむくれ者
須むわれさへ爾たひ心地する
可み那悲能山をす支てたつ多可
はをわ多利个る爾もみちのな可れ
个れ者

清原深養父

かむなひの山乎す支行秋なれ者多
徒た可八こそぬさ八堂む久る

寛平御時中宮歌合

藤原興風

志らな見爾惡支のこ能は農う可へる乎
あま乃な可せる不年可と所みる

龍田河の邊爾て　坂上是則

毛美知はのな可れ散利世は多つた可八
みつ能あ支乎は多れ可しら末し

志賀能山こえにて　春道烈樹

邪末可は爾加世能可け多るし可ら美は
な可禮无阿へぬ毛みちな利け利

池邊爾紅葉能ちる乎　躬恒

可世不个婆お川類もみちは美都き與
美ちらぬ可个散へそこにみえ川ゝ

亭子院御屏風のゐ爾河わ多らん
とするひと无美知ゝ流木の毛とに馬
乎とゝめ天たて類を讀世給へる　躬恒

多知わ多利美てを和多らん紅葉はゝ
阿め登不類と茂水はまさらし

古れ散堂能親王の家能歌合爾　岑忠

山多もる秋の可利ほ爾おくつ一ゆはいな
於本せと利のなみ堂な利个利
多意しら須　よみひとしら須

奉爾しいてぬやま多をもると可らこ
ろもいな八のつゆ爾ぬれぬよそな支

題しら須　　讀人しら須

閑連類多爾於不る悲徒ちのほ爾いて
ぬ者世乎以まさらにあ支八てぬと可
　逼照可まつ多个と利に北山爾ま可
　れり希るによめ流

素性　法師

もみちはゝ楚てにこ支いれて毛てゝ
なんあ支はか支利とみむ人のため

寛平御時古歌たてまつれと仰

事あ利个るに多都太可はも
みちはな可るといふわ可をとも

讀氏其情をよめる　　興　　風

み山よ利於ちくる水のいろみてそ秋
者可支利と於もひし利ぬる

惡支のはつる心をたつ多河を於も
飛や利て　　貫　　之

毎年二もみちはな可るたつ多可はみ那
登や秋の東万利なる覽

九月つこも利に大井爾て

貫　　之

ゆふつ久よをくらの山爾なくし可のこゑ
こゑ能うち二やあ支の久るらん

同つこも利の日　　躬　　恒

305
10

みちし羅はたつ年も行むもみ知
葉をぬさとたむ个てあ支はい二个利
利

昭和十一年九月十五日印刷
昭和十一年九月十五日発行
定価金弐圓参拾錢

編輯者　東京市下谷区中根岸町七三　武田常春方内
印刷人　東京市下谷区中根岸町七三　武田常春
発行人　東京市芝区三田四国町一番地　武田常春
発行所　東京市下谷区中根岸町七三　武田書店
振替東京六〇三五四八七番
電話静岡四六〇番
東京市芝区三田四国町一番地
電話芝一六〇〇番
東京市芝区三田四国町一番地
電話芝一六〇〇番
東京市下谷区中根岸町七三
電話下谷一六〇〇番
東京市下谷区中根岸町七三
電話下谷一六〇〇番
東京市下谷区中根岸町七三
電話下谷

一本貳拾錢
昭和十一年九月廿五日印刷
昭和十一年九月廿七日發行
定價金貳圓參拾錢
發行所 東京市下谷區仲御徒町二
武田書店
振替口座東京六〇三三番
印刷人 東京市下谷區仲御徒町二
新興印刷株式會社
發行人 東京市代々木西原町一番地
武田祐吉
東京市代々木西原町一番地
武田書店
切取（四）

301
10

終